

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|-------------------|---|
| 題目(和文) | 現代日本の建築作品における拡張公共空間の構成 |
| Title(English) | COMPOSITION OF EXTENDED PUBLIC SPACE IN JAPANESE CONTEMPORARY ARCHITECTURE |
| 著者(和文) | FAASGUILLAUME |
| Author(English) | Faas Guillaume |
| 出典(和文) | 学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9296号, 授与年月日:2013年9月25日, 学位の種別:課程博士, 審査員:塚本 由晴,藤岡 洋保,宮本 文人,安田 幸一,奥山 信一 |
| Citation(English) | Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9296号, Conferred date:2013/9/25, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,, |
| 学位種別(和文) | 博士論文 |
| Category(English) | Doctoral Thesis |
| 種別(和文) | 審査の要旨 |
| Type(English) | Exam Summary |

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

| 報告番号 | 甲第 | 号 | 学位申請者氏名 | | Guillaume Faas | | |
|-------------|-----|---|---------|-------|----------------|----|--|
| | | | 氏名 | 職名 | | | |
| 論文審査 審査員 | 主査 | | 塚本 由晴 | 准教授 | 奥山 信一 | 教授 | |
| | 審査員 | | 藤岡 洋保 | 教授 | | | |
| | | | | 宮本 文人 | 教授 | | |
| | | | | 安田 幸一 | 教授 | | |

論文審査の要旨 (2000字程度)

本論文は、「Composition of Extended Public Space in Japanese Contemporary Architecture」(現代日本の建築作品における拡張公共空間の構成)と題し、以下の5章から構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景、目的と意義、研究の資料と方法、従来の研究との比較、および論文の構成と概要について述べている。本章では、公共空間をすべての人々がアクセス可能な外部空間と定義した上で、屋根や壁といった建築要素によって規定され、かつ人々が自由にアクセス可能な領域を「拡張公共空間」として定義し、その公共空間と建築物の間を調整する役割について述べている。また拡張公共空間が、時代を超えて用いられてきたと同時に、それに類する概念が様々な建築論によって論じられてきたことを踏まえて、これを公共施設の空間を人々に開かれた都市空間の一部とする建築意匠論として問題にする意義を述べている。また古代ギリシアのアゴラなどの都市空間を参照することによって、「拡張公共空間」が、歴史的な都市空間の型をアナロジーとした「闕」「アーケード付き中庭」「外部傾斜空間」として検討できる理由を述べた上で、これらの空間原理を抽出し、それが応用されている現代日本の建築作品を対象に構成の分析を行い、その性格を構成類型の抽出を通して明らかにするという研究の方法と目的について述べている。

第2章「闕の構成」では、外部空間と内部空間の境界部分に位置し、その間の移行のシーケンスを伴う「闕」の空間に着目し、その構成を透明性のある内部空間や屋根や壁などの建築要素によって規定された外部空間、およびオープンスペースを含めた建築物へのアプローチ動線、闕と建築ヴォリュームの平面的な配列を分析することにより構成類型を抽出し、それらの比較からヴォリュームに闕が包含される「分離」、ひとつの闕がアプローチとなる「集中」、複数のヴォリュームに闕が接続する「分散」、闕がヴォリュームを包含する「曖昧化」として、闕の多様な性格を明らかにしている。

第3章「アーケード付き中庭の構成」では、建築ヴォリュームやアーケードによって囲いとられた内部でありながら、外気に曝されるという意味で外部である、内外の二重性を持つ中庭の空間に着目し、その構成を建築ヴォリュームに対する中庭の配列、中庭へのアプローチ、中庭の素材、さらに中庭とアーケードの配列を分析することにより構成類型を抽出し、それらの比較から、中庭のもつ内外の二重性にアーケードのもつ内外の二重性が加わることによる「強調」「ヴォリューム主調」「アーケード主調」「協調」といった囲みの階層性の特徴と、アプローチによるシーケンスとスケールの段階的変化に関する「手前・奥」「回遊・放射」などの経験的特徴の重ね合わせによって、アーケード付き中庭の多様な性格を明らかにしている。

第4章「外部傾斜空間の構成」では、公共建築に付随したスロープや大階段といった外部傾斜空間には、高低差をつなぐ方向性により、頂、底、側および傾斜面の上、下という隣接する位置の違いが生じることに着目し、それらの位置を占める建築ヴォリューム、アプローチレベル、エントランスなどの要素の種類と、線状、樹状、網状といった配列を分析することにより構成類型を抽出し、それらの比較から「軸」「偏り」「袋小路」「集中」「分散」のアプローチまわりの性格と、それらがヴォリュームにより包囲される、あるいは屋上に設置される展開型を明らかにしている。

第5章「結論」では、第2章から第4章までで得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

以上を要するに、本論文は、公共空間と建築物の間を調整する建築化された領域である拡張公共空間を、歴史的な都市空間の型をアナロジーとした「闕」「アーケード付き中庭」「外部傾斜空間」として定義し、それらが応用された現代日本の建築作品を対象に、その構成を分析し類型を導くことを通して、それらの多様な性格を明らかにしたものである。この結果は拡張公共空間に備わる空間の原理の、現代建築作品における多様な展開を位置づけるものであり、公共施設的设计において公共空間と建築物の領域をつなぐための知見と方法を与えるものと考えられる。従って、本論文の成果は、建築学および工学に貢献するところが大きく、博士(工学)の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。